

採録「総合開館 20 周年記念事業 国際シンポジウム『写真美術館はなぜ、必要か?』」

写真美術館はなぜ、必要か?

キム・スンヒ

韓国、元大邱市立美術館館長

写真美術館はなぜ、必要か？

キム・スンヒ

写真が現代美術の展覧会で重要なメディアとして見なされるようになり、写真美術館も、昨今その存在感を増してきています。キュレーターである私も、写真作品に惹かれており、自分が企画する展覧会に多くの写真家を招聘してきました。しかしながら、かくいう私自身も、展覧会のテーマによって傾向は変わるものの、写真よりも先に絵画、インスタレーション、メディア・アートを招聘作品として検討してしまいます。

このことに加えて、他の美術館の多くのキュレーター同様、私も写真美術館のキュレーターに比べて写真に関する専門知識が劣っています。写真を研究する予算も、写真芸術に接する機会も限られているからでしょう。したがって、一般の美術館における写真の展覧会は、写真美術館における写真の展覧会に比べて若干異なる視点と文脈を有しています。写真美術館の必要性を説く際に最も強調すべきことは、それなしでは写真家たちの仕事が見すごされてしまうという深刻な問題です。この問題点を、韓国における写真芸術の現在形を紹介しながら説明いたします。

韓国文化体育観光部の2015年の統計によると、韓国には982の美術館が登録されています。内訳は、780の考古学博物館と202の美術館で、後者のうち3館が写真を専門とする美術館です。ソウルにある写真美術館、釜山にある古隠^{コウイン}写真美術館、および江原道の寧越^{ニョウウォル}郡にある東江^{トンガン}写真博物館がこれに含まれます。東江写真博物館のみが公立なのですが、ソウルから約3時間離れた田舎にあるために、訪問者にはあまり人気がありません。したがって、ソウルの写真美術館、釜山の古隠^{コウイン}写真美術館が、韓国において最もアクティブかつ影響力のある写真美術館ということになります。登録された美術館ではないものの、ソウルにある一字^{イルウ}スペースも、写真を中心に展覧会を組んでいます（韓進グループと提携している一字財団によって運営されています）。2016年には開館された12の美術館には写真を専門にしたものはありませんが、喜ばしいことに、ソウル美術館が5年後に写真美術館をオープンするために準備をしています。



上に挙げた三つの写真美術館と一字スペースは、定期的に写真の展覧会を企画し、作品を収集し、優れた写真家のための賞を設けています。若く才能ある写真家を発見し、支援する非常に重要な役割を果たしているわけです。加えて、写真に関連する出版、教育、研究セミナーの普及活動に力を入れています。しかしながら、韓国の主要な美術館は、稀にしか写真の展覧会を企画しないのです。以前に増して写真に注目が集まるようになった今も、展覧会の大多数は、ベテランのアーティストから寄贈された作品群や、毎年恒例のグループ展で占められてしまっています。

上記に述べた場に加えて、より実験的で、ジャンル横断的な作品を見せることを目的とした大邱写真ビエンナーレも開催されています。「邂逅」というポートフォリオ・レビュー・プログラムは、新たな写真家を発掘し、作品を世に知らしめるために行われています。

韓国のアート市場においても、写真が二番手に置かれていることを付け加えておかなければなりません。トランク・ギャラリー、ギャラリー・ラックス、Xii ギャラリー、ギャラリー・リュミエール、そしてキム・ヤング・ソブ写真ギャラリーといった一握りのギャラリーしか、写真に焦点を当てていません。それらは皆、財政難に喘いでいます。不景気ゆえに、個人バイヤーの数が縮小し、ほとんどのアーティストの収入は、美術館によるわずかばかりの購入費に頼ってしまっています。

概して、写真というメディアに集約したプログラムは稀です。写真アーティストの数が増大しているという事実にもかかわらず、作品を展示するチャンスはより少なくなっています。作品を売ることが困難となり、多くの有能な若い写真アーティストたちは、パートタイムやフルタイムの仕事として、商業写真を撮ることによってやり繰りしています。つまり、写真アーティストを育成し、写真というメディアを理解し、鑑賞するために、写真美術館は必要不可欠なのです。

韓国における写真美術館の現在形を理解するための文脈を提供するのに役立つと思いますので、今までお話した主要な美術館に関係する写真などの資料を以下に紹介いたします。

主要な美術館において過去 2 年間のうちに開催された写真コレクションと展覧会

国立現代美術館 (www.mmca.go.kr)

所蔵作品総数：7,981 点 (寄贈作品数：3,683 点)、

写真作品数：905 点 (寄贈作品数：304 点)

展覧会：毎年約 40 に登る展覧会が開催されましたが、過去 2 年に企画された 80 の展覧会のうち、3 つが写真展でした。

1. 「私たちが知っていた都市—カン・ホングとエリア・パクの写真」(Photographs by City We Have Known)、2015年
2. 「ヨック・ミョンシム回顧展」(Yook Myong-Shim Retrospective)、2015-2016年
3. 「私から公へ：1989年以降の韓国の写真」(Public to Private: Photography in Korean Art since 1989)、2016年

ソウル市立美術館 (<http://sema.seoul.go.kr>)

所蔵作品総数：4,348点（寄贈作品数：3,683点）、

写真作品数：600点（寄贈作品数：約250点）

展覧会：5会場において、40の展覧会が開催されました。

1. ソウル・フォト・フェスティバル、2016年
2. 2016年、寄贈作品展「カン・ボンギユの写真—人間劇場」(Photographs by Kang Bong-kyu: Human Theater)、2016年
3. 「リー・ジュヨン写真スタジオ」(Lee Juyong Photographic Studio)、2016年
4. 韓仏修交130周年記念展「透明人間たちの家族」(The Family of the Invisibles)、2016年
5. ソウル写真フェスティバル、2015年
6. ジュ・ミュンドク展「顔」(Faces)、2015年

釜山美術館 (art.busan.go.kr)

所蔵作品総数：2,407点、

写真作品数：121点（寄贈作品数：65点）

1. キム・ボクマン寄贈作品展「不慣れな親近感：記憶の残滓」(Unacquainted Familiarity: The Residue of Memory)、2016年
2. チェ・ミンシク寄贈作品展「今！瞬間の記憶」(The Moment! The memory of a moment)、2015年

大邱美術館 (www.daeguartmuseum.org)

所蔵作品総数：1,007点、

写真作品数：42点（寄贈作品数：5点）

1. 「アジアの現代写真—ワン・キンソンとジョン・ヨンドウ」(Asian Contemporary Photography: WANG Qingsong, JUNG Yeondoo)、2014年
2. ヤン・フードン展「私を感じる光」(Yang Fudong, The Light That I Feel)、2016年

写真美術館、ソウル (<http://www.photomuseum.or.kr>)

ハンミ写真美術館として広く知られているソウルにある写真美術館は、ガヒョン文化財団によって創設されたものです。韓国の薬品産業をリードするハンミ薬品によって運営されています。国内初の写真専門美術館として2003年に開館後、3年間で三つの写真賞を設けました。国内外の写真の歴史を研究する際に重要な学際的価値を誇る10,000にのぼるコレクションを所有しています。韓国の写真史にたゆみなく検討を重ねながら、国内や海外の現代写真に焦点を当てた様々な展覧会を企画しています。文化芸術教育と並行して、出版プログラムにも力を入れています。

古隠写真美術館 (www.goemunmuseum.org)

2007年に釜山に開館した古隠写真美術館は、古隠財団によって創設されました。質の高い展覧会を企画し、若い才能を見出し、育みながら、写真のアーカイブを構築することに尽力しています。また出版と教育を積極的に展開し、研究セミナーなどを企画しています。

東江写真博物館 (www.dgphotomuseum.com)

2005年に開館した、韓国初の公立写真博物館です。毎年夏に東江国際写真展を開き、写真賞の授与式も行っています。

一字スペース (www.ilwoo.org)

2010年に開館し、一字写真賞を主催しています。

大邱写真ビエンナーレ (www.daeguphoto.com)

2006年にスタートした写真ビエンナーレは、2016年に6回目を迎えました。私たちはどこから来て、どこへ行くのか? というテーマに沿って日本のアート・ディレクター吉川直哉氏がメイン展覧会「アジア・エクスプレス」の指揮を取りました。この展覧会は、21世紀後期のアジアの移り変わりゆく風景と環境を実験的に映し出すことを目指したショーケースとなりました。

(和訳：エグリントンみか)